

■ 書 評



みる よむ わかる 精神医学入門

ニール・バートン 著,
朝田 隆 監訳
医学書院
2015年12月 272頁
本体価格 4,200円+税

本書の原著の初版(Neel BurtonによるPsychiatry, first Edition)は英国でRichard Asher Prizeという優れた医学教科書に与えられる賞を受賞しているが、この度、原著第2版が邦訳され、「みる よむ わかる 精神医学入門」と本書の特徴を表す修飾語が加わった。井上ひさしの名言に「難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを面白く」とあり、学生へのわかりやすい講義を心がける際の1つの考え方になっているが、本書は学生向けのわかりやすい精神医学のテキストの1つの形を示したものであり、また精神医学の面白さを伝える読み物としての側面も合わせて持っている。

本書の構成は、Part 1として、第1章 精神医学小史、第2章 患者の評価、第3章 精神保健の提供 とあり、Part 2では第4章 統合失調症と他の精神病疾患 から第13章 児童・思春期精神障害まで計10章にわたり、網羅的に精神疾患がカバーされている。各章の始まりは、重要な学習項目として複数の項目が箇条書き的に示され、章の最後には(参考文献ではなく)推薦図書が提示され、セルフアセスメントテストで終わっている。加えて全体の最後には自己評価拡張型組合せ選択問題が提示されており、精神医学の学習書という面もある。本書を特徴づけている冒頭の章である「精神医学小史(第1章)」においては古代ギリシャから現代までの精神医学の流れを記載しているが、その歴史は他の思想的な流れを反映したものであることが述べられている。また、現代についてはフロイトとユングの思想の概要が記載されているなど重要な領域が強調されている。

序文に「精神医学の神髄は、人間らしさの本質的な意味を理解すること」とあるが、著者は学問の中にお

ける哲学の位置づけと、医学における精神医学の位置づけの類似性を論じている。哲学に関してプラトンやキェルケゴールなどが言及され、また多くの文学作品を中心とするコラムや挿入句、絵画や写真などの芸術作品がちりばめられている。引用された文学作品は多岐にわたり、ダンテ、シェクスピア、シャーロック・ホームズ、エドガー・アラン・ポー、ルイス・キャロル、ウィリアム・フォークナーなど、我々人間とは何かという問いと精神医学との接点により鮮明になるように構成されている。こうした要素が有機的に織り合わされており、引き込まれるような面白さを生んでいる。

評者に印象的なのは著者が1978年生まれであり、本書の初版が2006年であることで、30歳前の若い精神科医によって書かれたことである。この点はカール・ヤスパースが1913年に「精神病理学原論」(初版)を出したのは約30歳のとき、生涯にわたり精神医学の教科書の改訂を続けたエミール・クレペリンが1883年に最初の「概論」を著したのが27歳の若さであったことが想起された。

本書の際立った特色としては若手の精神科医であるNeel Burtonが、精神医学に興味のある学生が一般的な医療者の中にもある精神疾患に対するスティグマに影響され、精神科を選択するのを躊躇する状況に危機感を覚えたことを出発点としている点、さらには精神医学が本来は大変に面白いものであり、また重要であることを表現した点がある。このような目的で書かれたことは、ヤスパースやクレペリンの著書とは異なっており、ある意味で今日的な精神医学や精神科の医療の持つ課題でもあり、この部分についてはわが国の実情も相通じる面があると思われる。

新専門医制度が始まろうとする中で今後の精神科医には生涯にわたり研鑽を積むことが改めて求められている。本書の冒頭に掲げられている、「芸術は長く人生は短し」(ラテン語でArs longa, vita brevis.)という言葉は、古代ギリシャの医師ヒポクラテスが「医術を学ぶには長い月日を必要とするが、人生は短いので怠らず励むべきだ」という意味で述べた言葉に由来するが、学習書の側面も持つ本書を通じて、精神医学も人生をかけて学ぶ価値のあるものと改めて感じている。

(谷井久志)